

2021年度 独創的研究助成費 実績報告書

2022年 3月 24日

報告者	学科名	工芸工業デザイン学科	職名	教授	氏名	難波久美子
研究課題	台湾国立台南藝術大学との工芸分野における協働研究					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	難波久美子	工芸工業デザイン学科・教授	テキスタイルデザイン		
	分担者	島田 清徳	工芸工業デザイン学科・教授	テキスタイルデザイン	テキスタイル分野研究	
		真世土マウ	工芸工業デザイン学科・准教授	セラミックデザイン	セラミック分野研究	
		作元 朋子	工芸工業デザイン学科・准教授	セラミックデザイン	セラミック分野研究	
		渡邊 操	工芸工業デザイン学科・准教授	テキスタイルデザイン	テキスタイル分野研究	
岡本 汐加		工芸工業デザイン学科・助教	テキスタイルデザイン	テキスタイル分野研究		
研究実績の概要	<p>今年度は感染状況を鑑み、各大学で現地調査を実施し、オンライン等遠隔システム等を用いて研究を進めた。</p> <p>・本学(以降 OPU)と MOU 協定を結ぶ台湾国立台南藝術大学(TNNUA)は、いずれもその理念の一つに<u>地域振興</u>を挙げており、この協働研究では、<u>地域振興 X SDGs X 工芸</u>というテーマを掲げ、今年度はテキスタイル系分野に重点を置いた。岡山県の<u>地域資源であるいぐさ</u>、特に倉敷で育成を復活させている「<u>倉敷いぐさ</u>」に着目し、その<u>廃棄部分を材料に用いた研究を、染色と織りの双方で展開した。</u></p> <p>染色：いぐさの染色は化学染料である塩基性染料で染められているが、環境問題への意識が高い市場では、天然染料による染色へのニーズが高いことが販売現場では確認されている。しかしながら、その天然染料による染色は、これまでの研究文献においても極めて困難であるとされ、実用化できていない。この現状に対して、難波が過去に行ったセルロース系繊維特に綿の天然染色の研究成果を基に、実験を繰り返し、<u>いぐさの天然染色に成功した。</u></p> <p>織り：歴史的にいぐさは、ござの延長や代替えとして畳の材料として用いられ、その派生として床や机の上に敷くマットなどのインテリアアイテムとしていぐさは使われてきたが、現代では多くの他素材や選択肢があり、いぐさの新規需要開拓は難しいと判断した。よって、垂直使い・集積しない・粗密を作る・経糸を表面化させる、いぐさ先端を活かす、という新たな要素に着目しリデザインする方針を立てた。そして、粗密が安定した織組織ができるもじり織を用い、藍染めしたいぐさと糸綿麻混紡糸を用いて、円筒形に立てて使うテーブルライトのプロトタイプを作成した。</p>					

※次のページへ続く

<p>研究実績 の概要</p>	<p>これら天然染料によるいぐさの染色、及び、いぐさをを用いた新規アイテムの提案の研究成 果は、12月12日～19日、岡山市北区 TSUTAYA BOOKSTORE で開催の<u>展示会で発表した</u>。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 台南芸術大学においては、視覚デザイン学部材質デザイン学科テキスタイル系 Lu (陸), Cha-Hui 助理教授が、山間地域にある土や栽培植物のアボカド廃棄物となる種 を染料として用いる実験を行った。この研究は、<u>GLC レクチャーシリーズ#2</u>として、本 学で授業公開し共有がなされた。 ・ 共有するモノコトと異なるモノコトの二つの潮流が交わる研究活動は、グローバル社 会における協働研究の一形式を示すものになりうる。展覧会方式による成果発表を R4年 度実施すべく、その企画立案を今年度活動として実施した。本学では難波が、TNNUA では陸が代表者として、密に意見交換を行い<u>企画案を作成した</u>。台湾での開催地模索努 力として<u>国立台湾工芸発展センターへのプレゼンテーション資料を作成し、陸助理教授 へ送付した</u>。 ・ この展覧会企画は「<u>公益財団法人日本台湾交流協会</u>」へ2022年2月に申請を行った。 (代表申請者：難波、参加：島田、真世土、作元、渡邊) ・ この企画に付帯する行事を「<u>財団法人ウエスコ学術振興財団</u>」へ2022年3月に申請を 行う予定にしている。(代表申請者：作元、参加：難波、島田、真世土、渡邊)
<p>成果資料目録</p>	